

## 41 盲ろう者に対するゴールボール指導実践報告

自立支援局 理療教育・就労支援部 理療教育課 江黒直樹

### 1. はじめに

近年、パラスポーツの認知度はパラリンピック等を通して高まっており、パラスポーツ体験会などが各地で実施されている。しかし、主としてトップアスリートの模倣を行う体験が多く、難しいプレイをする障害者に対し、尊敬の眼差しや注目が集まる傾向にあり、本来、障害者が安全に身体を動かすために工夫された、リハビリテーションスポーツとしての理解が浸透しきっていない。また、障害種別が同じ者同士や障害者と健常者とで実施することが多く、障害種別が異なる者同士と一緒に実施する機会が非常に少ない。そこで今回、盲ろう者を対象に、ゴールボールを視覚障害者と一緒に行う指導を実践したので報告する。

### 2. 盲ろう者とは

視覚と聴覚の両方に障害があり、光と音が失われ、他者とのコミュニケーションや一人での安全な移動が困難な状態で生活している。また、意思の伝達方法も異なり、音声、手書き文字、指点字や触手話、弱視手話などさまざまである。

### 3. ゴールボールとは

ゴールボールは、リハビリテーションプログラムとして考案された競技で、1チーム3人で行う。互いに相手ゴール（幅 9m）にボールを転がして入った得点を争う競技である。試合中はコート内の3人でコミュニケーションをとりながらプレイを行う。

### 4. 方法

本来、1チーム3人で行う競技ではあるが、4人（盲ろう者2人、視覚障害者2人）で実施した。視覚障害者2人は自陣コートのゴール中央の前と後に位置し、相手の投球を阻止する前衛と盲ろう者にパスを出す後衛とした。また、盲ろう者は自陣コートのゴール前（ゴールポストに触れている状態）の左サイドと右サイドに位置し、相手のゴールに向かって投球する役割とした。パスの方法は安全に配慮し、2つの方法に限定した。一つ目はゴールが1度揺れると盲ろう者は中央を向いて座り、自陣センターの後衛から転がって来るボールを捕球する。二つ目はゴールが2度揺れると盲ろう者はゴールポストを触り、自陣コートのゴール中央の後衛から手渡しでボールを受け取る。ボールを受け取った盲ろう者はゴールに背をつけ方向を確認し、相手コートに投球し、最初にいたポジションに戻ることにした。

### 5. 結果及び考察

盲ろう者に対して通訳者を介した個別指導を行い、複雑な動きも一定の理解を得た後、試合を行うことができた。また、障害が異なっても工夫次第では集団スポーツと一緒に楽しむこともできると考えられる。今回、盲ろう者と視覚障害者でゴールボールを行ったが、盲ろう者は振動数を判断し、行動に移す。視覚障害者は盲ろう者に対して意志の伝え方など、共に考える場面もあり、有意義な時間を過ごすことができた。固定観念に囚われず、競技の特性や障害の理解を深めることで、より多くのスポーツを障害に関係なく一緒に楽しむことができると考えられる。